

第30回府中市男女共同参画推進フォーラム



2016年11月19日（土）・20（日）開催

府中市・第30回府中市男女共同参画推進フォーラム実行委員会

第30回 府中市男女共同参画推進フォーラム記録誌

目 次

府中市長あいさつ	高野 律雄	1
実行委員長あいさつ	藤田 恵美	
登録団体連絡会会長あいさつ	加藤 良江	
基調講演『私の7Kライフ』	渥美 由喜	2
フォーラム30周年記念行事		
『フォーラムを振り返る』		8
記念上映会『八十七歳の青春 市川房枝生涯を語る』		11
講演		
『母 吉武輝子と私の生き方』	宮子 あずさ	12
『SOSはなぜ届かなかったのか』	杉山 春	14
ワークショップ		
パソコン連絡会／渋／をだまきの会／すみれ会		16
リフレッシュママ府中／NPO 法人けやきの会／ベビママビクス／Train Kids		17
府中市聴覚障害者協会女性部／サークルいきいき／認知症予防ネット東京府中		18
和文化研究会倶々楽		
ウィメンズアクション府中／おはなし夢くらぶ／Space 喜連／朝ヨガ		19
人形劇サークルのびのび／若松笑いヨガクラブ／BREMS		20
登録団体参加型活動紹介		
住吉養気会／ポピーズ／3B健康体操		20～21
参加・協力団体		21
会場風景		22
広報活動の記録		24
アンケート結果		25
フォーラム開催の歴史		26
フォーラム実行委員から一言		28
フォーラム実行委員会等開催記録		
男女共同参画都市宣言／奥付		

府中市長 高野 律雄



本日は、第30回府中市男女共同参画推進フォーラムへご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

このフォーラムは、男女共同参画社会の実現のため、各種の催しを通じて、多くの皆様が行政とともに問題解決に向けて歩みだすきっかけの場となることを目的に、実施するイベントでございます。

今年で30回目を迎えますが、このような知恵と工夫を凝らしたイベントを続けてこられましたのも、フォーラム実行委員会ならびに登録団体連絡会の皆様方のご尽力によるものでございまして、深く感謝申し上げます。

今年度は「男女でつくる 活躍の場」をテーマに展開しておりますが、このあと渥美由喜氏を講師にお招きし、「私の7Kライフ」について基調講演をいただくほか、女性センター登録団体等による各種講座を開催いたしますので、男女共同参画について改めて考える機会としてご参加いただければと存じます。

さて、現在本市においては、第5次府中市男女共同参画計画に基づき、さまざまな取り組みを進めているところでございます。今後も市民の皆様一人ひとりの協働により、男女の共同参画のさらなる推進を図ってまいりたいと考えておりますので、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

お集まりの皆様のご健勝と、ますますのご活躍を祈念いたしまして、市長の挨拶とさせていただきます。

実行委員長 藤田 恵美



お忙しい中、ご参加いただきましてありがとうございます。昭和63年にスタートしたフォーラムは、はや30回目を迎えました。これを記念して、昨日は「八十七歳の青春市川房枝生涯を語る」を上映しました。そして今日は、フォーラム歴代正副委員長8名

の方々と一緒に「フォーラムを振り返る」と題し、パネルディスカッションを行います。また、基調講演はワークライフバランスについての第一人者、渥美由喜さんからお話を伺います。明日は、宮子あずささんの「母 吉武輝子と私の人生」、杉山春さんの「SOSはなぜ届かなかったか 児童虐待事件を取材して」の講演を予定しています。是非、聴きにいらしてください。また、2日間を通してワークショップ、活動紹介、作品展示などがございますので楽しんでいただければと思います。

さて、今回のテーマは「男女でつくる 活躍の場」です。家庭、職場、ボランティアなどいろいろな活動のなか、場づくりは大変重要です。今回のフォーラムがきっかけとなって、たくさんの方が生まれればと思います。

それでは、第30回府中市男女共同参画推進フォーラム開催です！

登録団体連絡会会長 加藤 良江



本日、府中市男女共同参画推進フォーラム第30回の開催を無事迎えることができました

ことをお喜び申し上げます。開催にあたりましては、フォーラム実行委員会の皆様に多大なご尽力を賜り、改めて感謝申し上げます。今回のテーマは「男女でつくる 活躍の場」です。女性の活躍という言葉をよく耳にいたしますが、男性、女性の区別無く、一人ひとりが活躍できる場がもっと増えて欲しいと思います。このフォーラムが皆様の普段の生活や仕事のあり方を見つめ直すきっかけとなれば幸いです。

今回は、女性センター登録団体の21団体が講演会やワークショップに、また27団体が作品展示に、8団体が活動紹介パネルの展示に参加しております。日々の活動の成果を披露することが、皆様の生活の再発見につながればと願っています。フォーラムは、これからも回を重ね、更なる発展をしていくことと思っておりますが、女性センター登録団体として、これからも協力をしてまいりたいと思っております。

基調講演 『私の7Kライフ』

— 男性が子育て、介護、看護、子ども会活動から学んだこと —

講師： 渥美 由喜(あつみ なおき)



【講師プロフィール】

内閣府 少子化社会対策大綱を踏まえた結婚・子育て支援の推進に関する検討会 座長代理（兼務 東レ経営研究所）

1992年東京大学卒業。複数のシンクタンク勤務を経て、現在、ダイバーシティ・コンサルタントとして企業をサポート。10歳と6歳の子どもの育児に加えて、認知症の父親の介護にも奮闘中。

僕は学生時代、馬術部に所属し、府中競馬場でバイトしていましたので、府中に呼んでいただいて嬉しく思っています。

■「7K」とは

7Kというのは僕が使っている言葉で、「会社員」「子育て」「家事」「介護」「看護」に20年以上活動している「子ども会」を加えて6Kになります。あともう1つのKは「変わり者」です。僕は実は生まれつき発達障害なんです。

父が認知症なので、管理職としてバリバリ働いている妻と、子育て、介護をバトンリレーしながら働いています。

■宮大工とダイバーシティ

ちょっと自慢になりますが、うちの先祖は1,000年前に安芸の宮島を建てた宮大工の棟梁でした。宮大工の教えに「よい社を建てたいのだったら山を丸ごと使え」とあります。南向き斜面のすくすく育った木ばかりではだめで、北向き斜面で風雪をしのいで、ぎゅっと年輪が詰まっている頑丈な木は緑の下力持ちになるとか、東向き斜面の木を西向きに門に使うと慣れない向きで弱くなる。だから山を丸ごと使うのが良い建物を建てる秘訣なのだ。これは、ダイバーシティ・マネジメントそのものだと思います。人それぞれ個性があって、それを全て生かすと、よりよい社会になっていくということです。

■僕は発達障害

僕は発達障害で、しょっちゅう問題を起こしていたので、母は「うちの馬鹿息子がご迷惑おかけしてすみません」と謝って

いました。ただ、家に帰るとちょっと違いました。「あんたの体が動いてしまうのは生きる力があふれているからで、別に悪いことではない。1つでいいから好きなことを見つけて、それを極めれば食べていけるから」と、鷹揚に構えていました。実際、母も発達障害だったと思いますが、非常にありがたかったと思います。

ワークライフバランスという、仕事と生活を両立・調和させることは、今でこそ国の施策ですが、23年前研究員になったときに、「ワークライフバランス」を研究したいと上司に言うと、「日本企業はワーク・ワークで大成功した。ワークライフバランスをやるわけないだろう」と研究禁止命令を出されました。

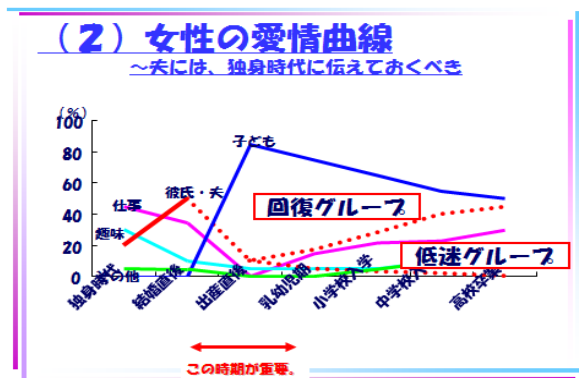
しかし、僕は発達障害なので、やるなと言われたことをやっていました。ただ、仕事でやるわけにいかないの、業務後に論文を読んだり、有給休暇を使って企業訪問してヒアリングしたりしました。20数年のうち10数年間は趣味として研究していました。

僕は、地域貢献したいという思いがあったので、独身時代に子ども会を始めました。冬のボーナスを全額はたいて青いクマの着ぐるみを買って、公園に行き始めました。しかし、当時の先輩、上司に話したところ、「そんな無償労働する暇があるなら会社に出てこい。やめないと評価下げるぞ」とおどされました。週末に自分の時間を好きなことに使っているのに、やめないと評価を下げるのは理不尽だと思って反抗してしまいました。本当に評価を下げられて、昇進・昇格ができなかった、しかも2年続けて。20代から30代まで、ダメ社員のレッテルを貼られた、ダメ研究者だったのです。

■子育て:イクメンと愛情曲線

イクメンという言葉、これ実は僕がつくった言葉ですが、イクメンになったのには、きっかけがあります。

愛情曲線というのがあります。女性たちの愛情を、いろいろな項目に配分して、ライフステージでどう変わっていくのかを見たものなのですが、結婚すると夫への愛情がトップに躍り出る。ただ、子どもが生まれたら子どもへの愛情がトップに躍り出る。夫への愛情がガクッと下がって徐々に回復、これが1つのパターンです。もう1つのパターンは、夫への愛情が下がったまま低迷するグループです。見事に二極化します。調べてみると、出産直後の乳幼児期、一番大変な時期に子育てを妻が1人でやりました、これが低迷グループと非常に高い相関関係がある。夫と2人でやりました、これが愛情回復グループと非常に高い相関があると。それに気づいてぞっとして、それがトラウマになって今一生懸命イクメンをやっています。



この愛情曲線が、NHK朝の情報番組「あさイチ」の「産後クライシス」をテーマとした回で取り上げられ、すごい反響がありました。それまでも育児ノイローゼとか産後鬱、マタニティブルー、いろいろな言葉があって、女性自身に問題があるとか、子育ての仕方に問題があるという言葉でしたが、産後クライシスはそうではない。そういう大変な時期に夫と一緒にやろうとしないから妻は大変だし、そういう夫婦の役割分業を認めてしまっている社会が問題だ、産後に危機がくるのは夫、社会の問題だろう、そういう切り口が斬新だったと思います。そして、反響の99.9%は、妻の夫に対する恨みつまみでした。「私は今も忘れません。あの40年前の出来事を・・・」怖いです。育児休業を2回とって本当に良かったと思いました。

■育児専業中

育児中、とにかくつらかったのは、まとまった睡眠時間をとれないことです。仕事のことが気になって、パタニティブルーにもなりかけました。仕事を休んでも平気な自分の存在価値とは一体何だろうと落ち込む。その上、うちの息子たちは本当におっぱい大好きだったので、僕の育児初日に息子がむず

かるのですよ。おっぱい欲しいと。「お前ではだめだ」と失格の烙印を押されて、切なかったです。

このまま家にいと引きこもってしまうと思って、公園デビューしたのはいいのですが、最初すごくストレスだったのが、地域の女性たちの、結論がないまま延々と繰り返されるネバーエンディングストーリー。職場では結論を求めて言葉のやりとりをしますが、地域では別に誰も結論を求めてしゃべっていません。皆さん親身になって話を聞いているふりをして、あんまり聞いていないんです。さっきここまで話が来たのに、知らないうちに元に戻っていると、くらくらしました。

あるとき、ある女性のご家庭の愚痴を話された。「うちの夫、本当に仕事大好き人間で全然家に帰ってこない。先週は2日しか帰ってこなかった。本当に夫は仕事をしているのかしら、どこかに女でもつくったのではないかしら、私どうしたらいいのでしょうか」と。今思うと、つぶやきみたいなものだったのですが、僕のテーマはワークライフバランスですから、「しめた、俺の出番だ」と、頼まれもしないのに意気揚々と、「今おっしゃったお悩みは多分課題が3つあって、1つ目の課題には対応策が2つあって・・・」と、思い切りコンサルモード全開で話し始めたら、皆さんドン引きしてしまいました。「この人は一体何者だ」みたいに。

僕はそのとき、愚痴を言われたら愚痴で返すのが礼儀なのだということを学びました。「育児初日に息子がぺちぺちたたいて、泣いて切なかった」という話をすると皆さん喜ぶのですよ。他人の不幸は蜜の味。愚痴を言われて愚痴で返している間に、何とも言えない強い連帯感が生まれます。そうやって、地域の言語と職場の言語の両方をマスターした「バイリンガル」だと名乗っています。

■家事について

育児をとって一番変わったのは、家にはこんなにつばいやることあるのだと気づくようになったことです。今日もまだ家族が寝ているうちに一人で起きてきましたが、昼間は家事をできないので、洗濯物をたたんできました。あとはお皿を洗っておこうと思ったのですが、妻がすでにやってくれていました。それが小さいサプライズなんですね。これが円満の秘訣かなと思います。ぜひ男性たちには小さいサプライズを覚えていただきたいと思います。

我が家の最近のキーワードは、「かわいい子には家事をさせろ」。僕らの夫婦の価値観を息子たちに押しつけるつもりはないのですが、息子たちが大きくなる20年後30年後、家事ができない男性はパートナー探しに苦労すると思っているから、仕込んでいます。これには知恵が必要です。「思い切り楽しんで、やりたがらせて、褒めてやらねば子どもは動かし」と。

僕が家で一番芝居しているのは、単純労働系の家事をしているときです。例えば、夕方帰宅して、ご飯つくって、片づけして、まだ散らかっている、すごくストレスです。そんな時、あえて楽しいふうに演じます。洗濯を口笛吹きながら、鼻歌歌いながらやっていると、子どもが、「お父さん何やってるの?」「これは洗濯という、大人しかできない大切なお仕事だ」「やらせてやらせて」「使い方を覚えてらね」「覚えた!」「おっ、こんなにきれいになって、洗濯の天才だな」となって、どんどんどんどんやる気になっていきます。

■子ども会

僕はイクメンは当たり前だと思ってます。自分の子どもをかわいがるなんて犬でもやっている。だから、**自分の子どもの子育てをきっかけに地域とつながっていく**、そういう男性がふえることがとても大切だと思うので、ささやかなボランティア活動の話します。

僕は今までに 2,000 人くらいの子と出会ってきました。僕が一番誇りに思っているのは、最初のころ来ていた子たちが高校生、大学生、社会人になって、20 人が一緒にやってくれていることです。

きっかけは、僕が学生時代に家庭教師をしていた子が起こした事件です。その子が悪い友達とバイクを乗り回しているという噂を聞いていましたが、最初の職場が忙しくて何もできなかった。どうしているかなという気持ちもだんだん薄らいできたときに、ある朝、新聞を読んで、背筋に冷や水を浴びせられたような気持ちになりました。彼は交際していた女性を監禁して殺めた犯人として載っていました。本当にショックで、僕は後悔しました。彼がちょっとぐれたと聞いた時に、どうして「久しぶりに飯食おう、話聞かからさ」と声をかけなかったのかと。自分が子どものころから発達障害で近所の人たちに迷惑をかけ、叱られ、諭され、褒められて育ってきたのに、地域で何もしていないのは全然だめではないかと思って子ども会を始めたのです。

僕が小さいころ、近所に「**がんジ**」といわれているおじいさんがいました。頑固なじじいだからがんジ。強烈な明治生まれの人でした。悪いことをするとげんこつで怒られ、でも、いいところは褒めてくれる。がんジがいて、いつも遠慮なしに叱ってくれた。そういう大人の存在がいたから、僕らは万引きをしなかった。柿泥棒をしなかった。僕は将来がんジになりたいのです。

子ども会をやっていて、いろいろ気づいたことがあります。よく、子どもは親を写す鏡だというのですけれども、僕は社会を写す鏡だと思います。社会のひずみが子どもに出ていると思います。

子ども会で、いまだにおやつを出しているのですが、食べ物を出すと家庭が見えます。中には、給食以外、子ども会のおやつしか食べていない、そういう子もいました。本当にこの豊かな東京、この飽食の中でも、餓鬼のように飢えた子がいます。

そんな子の一人に、この間久しぶりに会いました。その後施設に入り社会人になって、久しぶりに遊びに来てくれました。「あのとき楽しかったから、自分も子ども会を始めようと思っている」と言ってくれて本当にうれしくて、そういう子が増えたらすごくいいなと思います。

■父の介護

介護の話します。うちの父は認知症で、一時期統合失調がひどかったのです。罵詈雑言を浴び続け、手も出されて、僕はしょっちゅう青あざをつくっていました。

当時、父は、自分に向かってくる人は自分を殺しにくるという強迫観念があって、お巡りさんを殴る、2 回も車で事故を起こす。仕方がないので、僕は父に精神病院に入院してもらいました。そんなところに入れてしまったことがつらくて申し訳なくて、僕はもう仕事を辞めざるを得ないだろうと思って社長のところに相談に行きました。社長はじっと話を聞いてくれて、「わかった。君は仕事は後回しでいいから、お父さんの話をよく聞いてあげなさい。仕事はこっちでやっておくから、とにかく今はお父さん、家族と一緒に時間を大切に」、社長自身が苦労した人なので、そういうふうに温かい言葉をかけてくださった。おかげで仕事を続けることができ、結果的には3カ月で父は退院できました。今は軽度な認知症で安定しています。

実は2回目の育休のときは介護と重なっていて、赤ん坊を連れて父のところへ通いました。父の世話をするために実家に入り寄り、自分の家では掃除もしない、洗濯もしない、もうこっちは疲れ切っている。妻にしてみれば、産後復帰して仕事も大変、「あなた育休というけれども全然家のことやってないじゃない」「俺は大変なんだ。今日も親父にぶん殴られて、見ろよ、この青あざ」「私だって大変なのよ」。

「大変だ」合戦は泥沼ですね。その上、父は妻にも暴言をはいたため、私たち夫婦は離婚寸前までいきました。そのときに、実は救いになったのは2番目の息子が小児がんになったことでした。

人生がおもしろいと思うのは、ネガティブなことにさらにマイナスがくると、マイナス掛けるマイナスでプラスになるということがあるんですね。けんかなどしている場合ではないと思いました。息子も父も終末期かもしれない。大切な息子が小児がんで死んでしまうかもしれない。夫婦で助け合ってこの子の一日一日を大切に充実させてあげよう。

だから、「大変だ」合戦はやめた。それから我が家では、**大変だという言葉を使うときは必ず相手を主語にして使う**ようにしています。「最近大変そうだけれども大丈夫?」「私は大したことない。あなたのほうが大変そうじゃない?」。そうすると、お互いをいたわり合う心が生まれる。僕らは心から血を流すような思いでここにたどり着きました。

スティーブ・ジョブズが生前こんなことを言っています。「もし今日が自分の人生最後の日としたら、今日やる予定のことをあなたは本当にやりたいたろうか」と。僕と感じ方が似ているなと思います。

子育てと介護を両方やって、さぞかし大変だろうとよく言われるのですが、息子がいてくれるから介護が楽になっているし、父がいてくれるから子育てが楽になっている。そういう感じなのです。2倍大変かという、違います。1.5 倍くらい大変で、1.5 倍くらい楽になって、だからプラマイゼロくらいの感じ。

修羅場だったときに父と2人きりだったら、多分煮詰まってしまうと思います。救いは長男、オアシスは息子だったのですね。

うちの息子はおじいちゃんが大好きです。もともと大工の父は手先が器用でいろいろなものをつくれる。それが魔法使いに見えるみたいで、七夕に「大工になりたい」と書くくらい憧れなのです。

父のところに行くと、父がフルーツを切って出してくれる。息子たちはフルーツが大好きなので、「おじいちゃん、ありがとう」と言う。その瞬間、父はうれしそうな顔をします。満面の笑みです。

父は日々できないが増えていっています。トラブルが絶えないです。でも、それを責めても、嘆いてもしょうがない。いずれ自分もそうなる。父はまだできることがたくさんある。それを父にやってもらって、父が愛してやまない孫たちから「ありがとう」と言われる場面をつくる、それはとても大切なことだと思います。

■看護について

5年前に、次男の様子がちょっとおかしいのですぐ病院に連れていきました。精密検査を受けたら、左の脳に大きな腫瘍があるということがわかり緊急入院。その日から一月半、ずっと小児病棟で暮らし、いろいろなことを考えました。

まず1つ目は、育児休業を2回とって良かったということ。手術が成功した後、主治医から「渥美さん、よくこの1歳半という月齢で気づきました。もしあと1カ月、いや2週間気づくのが遅かったら手遅れになっていたかもしれません」と言われました。2人の子は個性は違いますが、同じ1歳半にしては様子がおかしいと、僕も妻も違和感を持ってすぐに病院へ連れて

行きました。保育園でも誰も気づかなかった。子どもを見るプロも気づかなかったけれども親が気づいたということです。僕は仕事が好きです。でも仕事を最優先して、ほかのことを全部後回しにしてしまったら取り返しのつかないことが世の中にはあると改めて思いました。早く気づいて早く対応して良かった、これが1つ目。

2つ目は、再発しないでほしいと祈ってはいるのですが、この子の人生は短いものになるかもしれないという覚悟はいつも僕の頭の隅にあります。息子の人生、ライフは長さではなくて密度だと思って、何とか一日一日を充実させてあげたい。それを実現するためにも、日々とにかく早く帰る。

だから、僕にとってワークライフバランスとかイクメンは、決して机上の空論でもきれいごとでもないのですね。もうとにかくそれをやらなかったら家族が幸せになれないのです。



■良かった探し

日々生きていて良かったことがたくさんありますが、良かったことをどんどん忘れてしまいます。もったいないので僕はメモっています。それが「**良かった探し**」です。それを隙間時間に読み返すと、良かったことがどんどん心の中で輝いて、膨らんできて、いつしか大変なことも大変ではなく思えてくる、そういう自己暗示です。

小児病棟で僕は一月半暮らしました。うちの子が軽症に思えるくらい重症な子がいましたが、子どもはすごく生命力があり、偉いと思う子たちもいました。

5歳の女の子が筋ジストロフィーで、どんどん体が動かなくなっていく。最初会ったときはちゃんと自分で食べられたのに、わずか2週間で食べさせてもらわないといけないうくらい進行が早い女の子でした。その5歳の子が、唯一動かせる唇を使って、夜になって「パパ、ママ」と泣いている小さい子を一生懸命励ますのです。「大丈夫だよ、お姉ちゃん一緒にいるよ、あした朝になったらママ来てくれるよ」と。残念ながらその子は天国に召されていったのですが、僕はあの子に会えて本当に良かったと思いました。

最近よく、国は「輝く」という言葉を使います。女性が輝く、

誰もが輝く。僕は女性活躍推進に120%賛成している人間です。でも、一部のバリキャリ女性だけが目立つとか、女性だけに輝けと負荷をかけるとか、そういう女性活躍に対して男性たちが逆差別だ、今に見ていると冷ややかな目で見ると風潮があるとしたら、それは違うのではないかと思います。

輝きというのは、明るいところではわからない。ちょっと薄暗いときに周りの人を照らす、それが輝いている人なのではないかと思います。「原始、女性は太陽であった」とか、本当に太陽として女性が輝いて、照らされた周りの男性、子どもたちが輝く。またその人たちの輝きで女性も輝く。それが正しい姿ではないかと僕は思うのですね。

僕は小児病棟で輝いている子たちをいっぱい見ました。あの5歳の子が言いました。「お母さん心配しないで。私はお父さんお母さんといつも一緒にいるから、また生まれなくなったら必ずお母さんのお腹に来るからね」これが最期の言葉です。自分がこれから死んでしまうかもしれないときに、残されたお父さんお母さんのことを気づかう、本当に偉いなと僕は思います。

今、国がやろうとしているワークライフバランスあるいは**男女共同参画**、これは「**良かったづくり**」だと思います。男性も女性も子育て中も介護をしている人も、誰もが働いて良かった、そういう職場づくり。また、誰もが府中市で生まれて育って暮らして働いて良かった、そういう地域づくりを皆さんなさっているのだと思います。

僕は大したことをやっているとは思わないのですが、下の子がもし短い人生になったとしても、生まれてきて良かったと思ってくれるように、父が長生きして良かったと思ってくれるように、ささやかでも一生懸命、父親として息子としてサポートしたい。

■手を差し伸べる

僕は今まで勘違いしていました。不幸が起きないのが幸せだと思っていました。でも、仮に何か起きたとしても、そこから逃げるのではない、誰かに押しつけるのではない、自分がきちんと向き合う。ただ、1人で抱え込むのは大変なので、**近くにいる人たちと協力して乗り越える、そのプロセスに幸せがある**と僕は気づきました。楽しいこと、うれしいことは妻と分かち合って倍増し、つらいこと、苦しいことは分かち合って半減し、職場でも一緒です。

「辛い」という字は**横軸を1本通すと「辛い」**になります。社会全体を見ると、辛い思いをしている人は女性と子どもが多いと思います、DVしかり虐待しかり。でも、そういうときに近くにいる人がちょっと横から手を差し伸べる。そうすると、その辛い人生も大きく幸いへと変わっていく。僕は、**ワークライフバランス**

の「**ワラバ**」の頭文字は、「**分かち合い、楽あり苦あり、バトンリレー**」の略語だと思っています。ちょっと横から手を差し伸べる、これは本当にとても大切なことだと思います。

7K、6Kで気づいたのですが、一方的に支援される人はいません。息子たちがいてくれたから父の介護が楽になった。また、父がいてくれるから子育てが楽になった。父が孫たちから「ありがとう」と言われる場面を僕はつくりたい。そうしたら、僕が将来年老いた時に、孫たちからまた「ありがとう」と言ってもらえるかもしれない。そういうふうに、みんな年上の人の背中を見て学んでくるということかなと思います。

「**支え、支えられるお互いさま**」という大日向雅美先生から教わった言葉があるのですけれども、今、**命のバトンリレー**をしているつもりなのです。もしかしたら僕が召される、父が召される、あるいは息子が…。そのときに、残された人たちが、その人たちが生きてきたことをバトンリレーしていく、これが生きていく喜びです。

■共感の連鎖

今日、府中市に呼んでいただいて本当に素晴らしいと思っただのは、地域思いの方たちが老若男女これだけいるということです。ただ、こういう取り組みは特効薬ではありません。「それはちょっと違う、男女共同参画なんて言ったって、正直女性は」というネガティブなことはいっぱいあります。僕はそんなときに1つの言葉を申し上げたい。「**共感の連鎖**」です。

僕のことを「髪を結んで変なやつだ」と思っている方がおられると思います。抗がん剤治療で髪の毛が抜けてしまう子たちのために、伸びた髪の毛を切っただけでつるつるヘアドネーションというボランティアがあるのですが、99.9%女性がやると聞いて、男性だってできると思って1年前に伸ばし始めました。僕はこういう髪が大嫌いなのですが、1年間やってきたら、同じことをやってみようという男性が3人出てきました。

要するに、1歩踏み出すと、必ず共感してくれる人がまた1歩踏み出す。僕は「**共感の連鎖**」が**社会を変える**と思います。

皆さんは既に府中市で「共感の連鎖」を起こしてきた方だと思います。またそれを広く地域に進めるための大切なイベントを毎年ずっとやってこられている。ぜひ、皆様の周りで、家庭で、地域で、職場で「共感の連鎖」を起こしていただきたいと思っています。

【質疑応答】

Q: 渥美さんは、ご家族だけでなく地域の方でも貢献されているということですが、何か人生の道しるべになるものがあるのでしょうか？

A: 尊敬している人が何人かいて、その1人が、三浦綾子さん

の小説「塩狩峠」の主人公、長野政雄さんです。長野さんは鉄道員で、非番の日に乗った電車でたまたまトラブルにあり、他の乗客を助けるために線路に身を投げ出したという人です。僕は高校時代に「塩狩峠」を読んですごく感動しました。人に手を差し伸べられる場面があったら遠慮せずには投げ出す生き方が美しいというのが僕の基本的な考え方です。

ただ、献身的に活動しているわけではなく、自分のためにやっています。多分、子ども会をやっていなかったらメンタル的にまいっていたのではないかと思います。自分が職業人として不遇でも、職場以外に居場所がある。待ってくれる子たちが救いだったと思うのです。

職業人、家庭人、地域人という、心を支える柱がたくさんあるということになりますね。仕事だけだと、仕事がうまくいかないとアイデンティティクライシス、自分の全存在が否定されてしまう。仕事はうまくいかなくても、温かい家庭がある、週末に地域で活動する場があると、その人を囲む柱がある。それが心のセーフティーネットです。

だから、僕は人のためではなくて自分のためにやっているのだと思います。



Q:ご自分が発達障害だとおっしゃることに違和感を覚えます。発達障害をどう理解すればいいですか？

A:発達障害をすごくネガティブな言葉と捉えていませんか。僕、実はすごくポジティブな言葉として使っています。発達障害は全然ネガティブなイメージではなく、要は個性なのです。だめなところはいっぱいあるけれども、いいところも多分あるだろうと。僕にとっての**発達障害**というのは**突破力、突飛力**みたいなものだと思います。

ダイバーシティで、**アクリル理論**というのがあります。金魚鉢に透明なアクリル板を置くと、金魚は向こうに行けるとしてアクリル板にぶつかる。ぶつかるから、だんだん狭いところで回遊を始めて、そっとアクリル板を抜いてもそこから出なくなります。でも、そこにアクリル板があったことを知らない金魚を入れると、当然向こうに行く。そうするとみんな後からついていく。

日本社会には見えないアクリル板がいっぱいあるわけです。もう本当はなくなっているのに、賢い健常者はあると思って動けない。子育ては女性しかできないと思ってぐるぐる回遊している男性がいたとする。

僕みたいなKYな金魚が、そんなのはおかしい、男性だって育児休業をとったって別にいいではないかと言って突破しますよね。そうすると、そういう生き方もあるのだとほかについてくる人がいます。だから、突破力があるというのが僕の発達障害の理解です。

■まとめ： 一歩踏み出す勇気を

那須自然学校の話させていただこうと思います。子どもは自然で育つのがとてもいいと思って、子ども会でもキャンプを開催しているのですが、一度も西東京市から出たことがない、府中市から出たことがない、そういう子が、お金を出せないから行けないという矛盾があります。

そこで、去年、貯金をはたいて那須に保養所を買い、子どもたちを連れていくという活動を始めています。子ども時代は旅であるということで、チャイルドジャーニーと名づけています。

養護施設の子や病気の子を招待したい。病気の子の兄弟にも手を差し伸べたい。来年には手回しオルガンを買い、病院へ行って宣伝しようと思っています。

老後の楽しみをつくりたいのですよ。僕は子どもが好きだから、子どもと接する場があると僕自身が幸せだと、そういう考えなのですね。

だから、皆様も**一歩踏み出す勇気**をもっていただきたいと思います。一歩踏み出す人がいると、そこに道ができるし、それに共感して「共感の連鎖」も起きる。府中市の子どもたち、特に恵まれない子どもたちにちょっと何か手を差し伸べるようなことを思いついたら、ぜひやっていただきたい。それは本当にその子たちの生きる力になると思うし、「共感の連鎖」を起こしていただければすごくうれしいです。

拙い話ではございましたけれども、ご清聴いただきまして、まことにありがとうございました。

『フォーラムを振り返る』

— 歴代正副実行委員長に聞く —



司会 フォーラム第30回を記念して、今日は歴代の委員長・副委員長を務められた方の中で、ご都合のついた8名の方々からお話を伺います。

早速、第2回委員長の田代さんからお願いします。

■「男女平等」社会実現のために

田代 1988（昭和63）年の第1回から委員としてフォーラムに関わりました。私たちの頃は、女性は大きな口を開けてしゃべってはだめだとか、洗濯物は男女別々に干すという時代でした。今は女性問題をある程度知っている方も多いと思います。

男女が対等な立場であらゆる活動ができる「男女平等」の社会を実現しなければならぬと思いますが、その問題に取り組むフォーラムを皆さんが受け継いでくださっていることをとても嬉しく感じます。

司会 お手元の記録誌の中の「フォーラム開催の歴史」には、皆様のお名前やテーマが掲載されておりますので、ご覧ください。

矢島 第3回「話しましょう、始めましょう」の時にフォーラムに参加、第4回から委員をしました。

当時、第3回世界女性会議(1985年)がナイロビで開催された後で、日本政府も女性の活躍に力を入れていかなければいけないというような機運になっていて、府中市では女性フォーラムをすることになりました。その頃のフォーラムは、基調講演とテーマごとの分科会があり、学習会という感じでした。

「勉強しよう、外に行って学んできて、またそれを府中で」という人たちが多く集まって熱気もありました。その熱気が高まったところで、女性センターをつくらせたい、つくらしようという話が出ていました。

出席者

田代 由美子（第2・17 委員長、3 副委員長）
矢島 千里（第6 委員長、5・23 副委員長）
横山 永望（第6 副委員長）
和田 安里子（第7 委員長、14 副委員長）
浅田 多津子（第9 委員長）
白井 紀子（第12 委員長）
小西 厚子（第13 委員長）
加藤 礼子（第15 副委員長）

司会

藤田 恵美（第27・28・30 委員長、29 副委員長）

■託児つきが当たり前

横山 私も第4回から委員をしました。フォーラムにはずいぶん関わっています。

私は男、女という意識はなく、男性だからお茶をくんではいけないとか全然思わないですね。本当に女性がつっと差別されていることをいろいろなところで感じていたので、少しでも協力できることがあればと思って、ずっとやっていました。

一番よかったのは、素敵な女性と知り合いになれたということ。入ってよかったと思っています。

和田 私は5回目から委員をやって7回目に委員長をしました。

若い方が委員になった時に一番問題になったのが託児です。フォーラム当日は会場のグリーンプラザの部屋を押さえてもらいました。ただ、委員会には託児がついていなくて。それで参加できないとか、参加しにくい方もいらしたので、子ども連れでも気兼ねなく会議に出られるよう、託児をお願いしていたのですが…

司会 今は託児つきです。今回は委員の方2名が利用しています。

和田 託児つきが当たり前のようになったのがよかったなと思います。

■女性センターの完成

司会 この女性センターが完成したので、第9回からフォーラムをここで開催することとなりました。

浅田 第9回委員長をしました。当時29名の委員がいました。ジェンダーチェックとかジェンダーフリーという言葉が広がっていった時代でしたが、ジェンダー（社会的・文化的に形成された性別）がよく分からなかったので第2分科会の助言者、都立大の江原由美子さんの講義を

学生さんと一緒に聴かせて頂きました。ジェンダーを取り上げたことが第11回のジェンダーフリーへと繋げられたのかなと思っております。

第3分科会は認知症のグループホームを運営されている安岡さんに、立ち上げた時代背景などのお話を伺いました。認知症を新しい目線で勉強することができました。ポスターに描いてある1輪の花はみんな一人ひとりだと。「明日の自分を見つけよう！」というテーマを掲げた第9回でした。

白井 第12回は「キテ・ミテ・ハナソー 女(ひと)と男(ひと)との素敵な関係」というとても素敵なネーミングを全員でつくりました。

分科会では、メディアリテラシーを初めて学びました。メディアを読み解く力の必要性を実感しました。フォーラム後、グループをつくり、奈良橋先生とフェリス先生をお呼びして、皆で勉強を始めました。また、吉武輝子さんの福祉と介護保険についての講義は印象深かったです。今回、娘さん(宮子あずささん)が講演なさるんですね。そしてドメスティックバイオレンス、DVも学びました。

フォーラムで学んだことに先鞭をつけて、地域をもっともっとリードしていかなければいけないと思います。

小西 私は第13回の委員長をしました。その年は「男女共同参画宣言都市奨励事業記念フォーラム」です。「男女共同参画都市宣言」については、(平成8年に)市から女性センター運営協議会に依頼され、できあがった宣言文が1999(平成11)年、議会を通りました。それは男女雇用機会均等法が改正された年であり、また男女共同参画社会基本法が公布された年でもあります。歴史的にも非常にマッチしていると思います。

皆さんのお手元にある記録誌(13回以降のもの)には、男女共同参画都市宣言文が掲載されています。ちょっとご覧になってください。府中が男女共同参画宣言をした都市だということを府中市民に知って頂きたい。それと同時に、男女共同参画宣言をした都市の市民が何をしなければならぬのか、この機会にもう一度考えてほしいと思っています。

加藤 私は、ある女性のクラブの代表として委員会に出席して皆さんと一緒にやらせて頂きました。今、皆さん素晴らしいことをおっしゃっていましたが、委員会では楽しいことしか覚えていなくて。

地域的なものもありまして、女性が活動するということがなかなか殿方には理解してもらえなくて。年寄りと住んでいましたので、いろいろなことがありました。今の若い殿方は理解があるので、これでだんだんと男女共同ということが育っていくのかなと思って、楽しみに

しています。これからも勉強させていただきます。

司会 ありがとうございます。

■行政と市民の信頼関係

司会 一通りお話をして頂いたのですが、ここで小西さんに質問があります。第13回のフォーラムは、11月と翌年の3月に開催されていますよね。年度末にもフォーラムを開催したということですか？

小西 なぜ3月になったかは覚えていませんが、その年度は記念事業として11月19日に猪口邦子さんの講演会、翌年の3月に樋口恵子さんの講演会を行いました。

司会 私は第14回「ともにつころう わたしたちのまち」の時に初めて委員になりました。その頃のフォーラムも分科会がある学習会形式でした。今のフォーラムは、基調講演や講演会はありますが、他にいろいろな催物があります。女性センターを知ってもらうことも1つの目的です。そして、少しでも多くの人に来てくれるようにしよう、若い人たちが足を運んでくれるようにしようということを考えて開催しています。委員の数は少なくなりました。今年は11人です。

和田 何回目だったか忘れましたが、市民の方から分科会の講師が偏っているのではないかという電話が女性センターにかかってくるらしいのです。その時「内容に関しては実行委員会に任せています。そこで承認した講師ですので、もし反対のご意見をおもちでしたら、来年度の委員に応募して主張されたいかがですか」と言ってくださったのです。職員の方の対応をいまだに「立派だったね」とその時の委員の人たちと話しています。行政と市民の信頼関係があったということです。

司会 そういう対応をして頂くとうれしいですね。いろいろな意見の方がいるから、本当に難しい部分がありますよね。

浅田 初代の女性センター館長の笹本さんが実行委員会メンバーに丁寧に接していただいた記憶があります。

加藤 第18回の時、女性センター開館10年目だったんですね。「素敵に生きよう男と女」というテーマで講師をどなたにしようかと迷っていたとき、偶然、神津カンナさんとお会いしました。思い切って話しかけて講師の依頼をしました。「役所からお電話してもいいですか」と言いましたら、カンナさんも快く名刺をくださって、とんとん拍子で決まって。それで開催したグリーンプラザでの講演会はとても好評で、良かったなと思いました。

横山 歴代委員長、副委員長のお名前を見ていて、残念だけれども亡くなった方がいらっしゃいますね。

司会 私が存じ上げている方は佐藤法恵さん、岡崎妙子さん、金指光恵さんです。本当に残念です。

横山 印象に残るといったら、矢島さんが赤ちゃんを連れて実行委員会に来られて。託児がないのに頑張られていましたよ。

矢島 委員の方々が本当に親切で、交互に抱いてくださって。最後の会議のときは授乳しながらでした。いい雰囲気でしたね。今もきっとそうだと思いますけれど。

司会 ありがとうございます。

■これからのフォーラムは

司会 さて、フォーラムのこれからのことについて順番にご助言を伺いたいと思います。

田代 今はもうずいぶん女性問題の考え方も変わってきていますし、女性が社会の中で活躍されたり、幸せに暮らしている方もいらっしゃるのですが、やはり底辺にいらっしゃる方がまだまだおられるのではないですか。女性の問題や権利を、フォーラムだけではなく、もっと世間に広げる方法はないのかなとも思っています。

矢島 男性委員がなかなか増えていかないですね。今日の午前の講演者（渥美由喜さん）のように、男性のモデルになるような人、素敵な男性委員の方が出てきてくれるといいなと思います。

田代 女性フォーラムでしたからね、昔は、だから女性しか行けないという感覚を男性はもっていた部分があるのではないのでしょうか。

司会 女性フォーラムから男女共同参画推進フォーラムになって、もう15回目になるのですが…

田代 女性は役職につけないことがまだまだありますので。いつになったら本当に男女が幸せに暮らせるかなと。早くなしてほしいなと思っています。

横山 ジェンダーギャップ指数は144ヶ国中、日本は111位。本当にひどいですよ。みんなもっと意識してほしい。もちろん男性の意識が変わらなければいけないですが、私はもっと女性、ここにいるような方ではなく、一般の女性がもっとしっかりして頂きたいと思っています。そういうことで、フォーラムのほうも頑張ってください。

和田 私たちまでの世代が、女性だというだけで息苦しいとか自己実現しづらいことがあったように、生物学的に男か女に分けるという考え方にとっても違和感がある人たち（性同一性障害）がいる。生きづらさを与えていたかもしれないという自省も込めて、そういう人たちの姿も見えるような時代になってきましたので、これから男女共同参画といった場合に、生物学的な男女の性の「男・女」だけという考え方を変えていく必要があるのかなと思います。

浅田 ジェンダーギャップ指数の中で一番のウイークポイントは、女性の政治参加ですよ。

司会 そうですね、少ないですね。

浅田 今、府中の市議会議員も30人中、女性は5人しかいません。自分たちの生活の仕組みをどうやって自分たちらしくつくれるか。意識のある女性を議会に送らなければ変わらないと思います。一人ひとりが考えて、一人の声でも政治参加になりますし、政策提案をどんどんしていっていいかと思っています。

白井 やはり楽しくなければ人は集まらないです。関心をもってもらう、そういう機会を数多くつくってもらえたらいいかなと思います。

司会 たくさんの方々に関心をもって、足を運んでもらいたいと思います。

小西 私は、2013(平成25)年まで府中市男女共同参画推進懇談会という組織に関わっていて、男女共同参画を推進するための提言をしてきました。その中の1つ、男女共同参画条例をつかってほしいと言い続けています。

加藤 せっかくのフォーラムだから、PRを一所懸命して頂きたいなと思います。よろしく願いいたします。

司会 今日は本当にありがとうございました。



2016年10月26日(水)に、世界経済フォーラム(WEF)が、男女平等の度合いを数値化し、順位を決めるジェンダーギャップ指数(世界の国々の男女格差)を発表した。

日本の順位

- ・国会議員における男女比率…122位
- ・官民の高位職における女性比率…113位
- ・女性の専門的技術的労働者の比率…101位

記念上映会

『八十七歳の青春 市川房枝生涯を語る』



府中市男女共同参画推進フォーラムが第30回を迎えたことを記念して、フォーラム開催の前日の11月18日（金）、2回にわたって映画上映会を開催しました。

映画は、「八十七歳の青春 市川房枝生涯を語る」です。

市川房枝氏は、婦人の参政権獲得、女子差別撤廃条約の署名参加など、平和で平等な社会の実現のために、女性の権利獲得に情熱を傾けた活動家であり、参議院議員を通算5期25年務めた政治家でもありました。1893（明治26）年に愛知県に生まれてからの御自身の生い立ちや活動、その歩んできた道りをみずからの言葉で語っています。彼女の言葉を通して、

戦前から戦後に続く婦人運動の歴史を知ることができる映画です。

市川氏と、その後続いた多くの女性の不屈の闘いがなかったら、今私たちが当然のように享受している女性のさまざまな権利もなかったはずです。今日の男女共同参画の取り組みの源泉について改めて考えさせられる映画でした。

参加者の感想(アンケートより抜粋)

- ・市川房枝さんの素晴らしさを再認識した。私の母もずっと市川さんを応援していました。(女性)
- ・100年以上も前に、女性の権利獲得のために頑張った女性たちに恥じない社会にしなければとつくづく思いました。「政治の腐敗がファシズムへ向かわせる」の言葉、考えさせられました。(女性)
- ・市川さんの伝えたかったことを今の時代の状況の中で生かしていきたいと思えます。勉強しなければならぬことがたくさんあると思えました。(男性)
- ・今ある普通は、多くの努力とご苦勞の賜物だと実感しました。自分の人生を生きるだけで精一杯の私、エネルギーをいただきました。(女性)
- ・一人の女性の生きざま、題名にも惹かれた。どの写真でも笑っているのが印象に残った。自伝も読んでみたくなった。房枝さんの声を聞くだけで見る者の心に力が湧く。(男性)

※アンケートでは、映画の感想のほかに、来年度以降の催し物について、「男女がともにつくっていく社会を考えられる映画を」、「女性が元気をもらえるものを」、「もっと多くの市民に見てもらえるような広報の工夫を」などの意見をいただき、主催者にとっても実りのある上映会となりました。



『母 吉武輝子と私の生き方』



講師：宮子 あずさ
企画：市民活動研究会

【講師プロフィール】

1963年、東京都生まれ。
東京厚生年金看護専門学校卒。1978年から2009年まで東京厚生年金病院に勤務。13年、東京女子医大大学院を修了し、看護学の博士号を取得。現在も精神科の訪問看護師として勤務しながら、文筆、講演活動を行っている。
著書に「看護師という生き方」「両親の送り方 死にゆく親とどうつきあうか」など。
母は、女性の地位向上や反戦運動に精力的に取り組んだ、作家で評論家の吉武輝子さん(2012年没)。

■母と私

司会 インタビューする藤田恵美です。よろしくお願ひします。早速ですが、お生まれは東京のどちらでしょうか？

宮子 杉並区の下高井戸です。父はテレビ朝日の関連会社、母は東映の宣伝部の社員でした。両親はどちらも演劇が好きで、慶応大学の演劇研究会で知り合って一緒に暮らし始め、母が32歳、父が36歳の時に私が生まれました。

母は東映の採用面接で、今で言えばセクハラ的な、「彼氏はいるのか」とか、そんな質問ばかりされ、激怒して「あなたは自分の娘がここに来て、そんな質問をしますか」と言って帰ろうとしたら、面接官の1人に「宣伝部でも良ければ採りたい」と言われ、入社しました。

私を出産後、配置換えで、したい仕事ができなくなり、組合運動での色々なこともあり、結局退職したので、私が物心がついたとき、母はフリーの物書きでした。

今、「産後クライシス」という言葉が言われていますね。「子どもを産むことで男は何も失わないし、それは今も変わらない」と、母がよく言っていました。子どもを持つことで、男女の差別というものから目を背けられなくなる。だから、母は私に子どもを産めとは言わなかったし、私も子どもを産まない人生の方に関心が強かったので、早い時期から決めていました。

私の物心がついていく過程というのは、それこそ全共闘の運動があったりという時代で、母もウイメンズリブとか、フェミニズムに至る運動に関わっていて、ちょっと下の若い世代から頼りにされていました。今ではDVと言いますが、当時は暴力亭主と言っていて、母は、そんな夫を持つ女性が子どもと一緒に身を寄せるシェルター施設みたいなこともやっていて、家に子どもがワイワイいる時期もありました。

司会 育っていくうちに、母と娘で対立するようなことはなかったでしょうか？

宮子 いやそれは大変でした。どっちも口が立つわけですから。でも、実は私の場合、母が世の中に反抗している人だったので、いわゆる思春期の反抗期はありませんでした。

私が育ったのは杉並区の新興住宅街で、専業主婦の多い地域でした。母のマスコミ露出が一番多い時期で、身の上相談に出ては、別れたいなら離婚しまえとか、好きな男がいたっていいじゃないかみたいなことを言うものだから、「あの子とは遊んではいけない」と言われたり、家に直接電話がかかって来て嫌がらせを言われたり。

だから私は、そういう状況から母を守らなければいけないという気持ちが強かった。母の主張は見事なものだし、一緒に世の中と闘っていこうぜ！みたいなね。

■大学生のころ

宮子 それから、私自身、これは重要なのですが、決定的に世の中からずれてはいけないという気持ちがありました。私が大学に行ったのはそのためです。

大学では、フェミニズムの運動なんかをやる仲間が、運動することを通して親離れをしていくのを目の当たりにしました。ところが、私はというと、デモに行くと親がシュプレヒコールをしているわけです。同志だからといってこのままいってしまっているのかなという、ものすごい危機感があったのが20歳の時です。先々職はなさそうだったし、やはり手に職をつけた方がと、無理やり色々考えて選んだ仕事が看護師でした。

私は、母と同じようにフェミニストとして、母と生きて行こうというのは決めていたけれど、母のやり方ではなく、私のやり方でやりたいと。誰もが普通に望めば働ける仕事

で働き続けられるのがいいと思ったし、看護師は本当に女性の社会で、何となくフェミニズムの流れからは落ちているところもあり、そこに入って行くのは意味があるのではないかと思いました。

■看護師という仕事

宮子 20歳の時の看護師になるという結論は、自分の自立だったのだろうと思います。

その後の私のことをささっと言ってしまうと、大学をやめて看護専門学校に入り、看護師になりました。

2009年に、母の健康問題が大きくなり、書くことと看護師をフルタイムでやっていることに負荷がかかり、22年間働いていた東京厚生年金病院を退職しました。その後、看護師への支援をライフワークとしてやっていくため、東京女子医大大学院で博士号を取りました。

司会 看護師となられてから、ご本をたくさん出されていますね。ただ、内容的に制約があって、書くのが難しいこともあると思いますが…。

宮子 それはあります。でも、看護師もすごく傷つくことがあるということもたびたび書いています。好きなことを書いている割に、ひどい苦情というのはほぼ受けたことがありません。私はいつも、読者の人がどう読むかが全てだと思うのです。だから、そう読まれるのは本意ではないとか、そのつもりはなかったというのは、書き手として恥ずかしいことだと思っています。

実は、看護師になろうと決めた時点で看護師の仕事をちゃんとわかっていたわけではなく、自分に適性があるかどうかとも考えませんでした。

実際には向いていなかったと思います。まず、不器用なんです。そして好き嫌いが激しい。だけど、一面で、仕事の適性って、やはりやってみないとわからないところがあるんですね。

私は、自分が嫌いだということは隠さない。自分に対してはうそをつかない。嫌いって感情を感情のままにちゃんと自覚すると、頭でコントロールできるんです。正義・不正義みたいな話に置き換えてしまうと、本当にうまく行きません。なるべく相手を裁かないようにするというのが、実は看護師として働いていく上ではすごく大事なことです。私は不器用だし、好き嫌いも激しいけれど、そこへの対処というのは、何となくできているかなと思います。



■母を見送る

司会 お母様を看取られたお話を伺いたいです。

宮子 母は長患いでした。昔、結核をやっている、肺機能のベースが悪く、40代からは膠原病になったり大腸がんを切ったりと、本当に大変な経過でした。何度も死線をさまよって、都度、驚異的な生命力で生き抜いて来ました。

私が小学3年から4年ぐらいの時、「ママと私は友だちよね」って言ったら、「親子は友だちなんかになれないんだ」と、鬼のように怒られたことがありました。「親子の関係なんて50年で十分だ」とも言っていました。親なんて権力者だから50年も君臨すれば十分だと。

結局、母は私が48歳の時亡くなりました。だから、それはそれで見事なものというか、本当に私と母の関係は、50年行かず終わりました。

母を見送って、改めて今、やはり「死ぬ」って大変だなと思います。



■質疑応答

司会 では最後に、質問をお受けします。

参加者 長く働いた臨床の現場から転職して、博士論文を書かれたそうですが、それはどういう分野で、どう活かそうと思われたのか、教えてください。

宮子 東京女子医科大学にある看護職生涯発達学という、マイナーですが、看護職の人生とか制度とかを幅広く研究できる分野です。そこで、サルトルの哲学を用いて看護を意味づけ、看護に応用するというような立場で研究しました。

サルトルの哲学の好きなところは、選択せずには生きられない存在としての人間観で、そこに臨床に近いものを見たんです。看護師として関わっている現場は、大体みんな好きで来た人たちではありません。だけど、その好きで来たわけではない世界で多くの選択を求められるわけです。看護師の大変さというのは、選択の問題に常に関わらなくてはいけないことだというふうに感じています。

サルトルの哲学を学ぶことを通して、自分が何かをちゃんと提示できたらいいなと思います。そして、それが母の言う「学問をしろ」ということにつながるとすれば、母にとっても、私がこう生きて本当によかったなと思えるような人生になるといいなと思っています。

司会 今日は本当にありがとうございました。

『SOSはなぜ届かなかったのか』－児童虐待事件取材して－



講師：杉山 春
企画：府中ネット

【講師プロフィール】

早稲田大学第一文学部卒。雑誌編集者を経てフリーランスライターとして、子育て、親子問題などをテーマにルポを執筆。

著書「ネグレクト 一育児放棄 真奈ちゃんは何で死んだか」(小学館)は、小学館ノンフィクション大賞を受賞。その他の著書「ルポ 虐待－大阪二児置き去り死事件」(ちくま新書)、「移民環流」(新潮社)など。

虐待やネグレクトは家庭だけの問題ではない。社会の問題として一緒に考えたいと、ルポライターの杉山春さんをお迎えして、「SOSはなぜ届かなかったのか」をテーマに講演会を行った。

■愛知で起きた3歳女児のネグレクト事件

2000年、愛知県の団地で3歳の女の子が段ボール箱の中で餓死した。正社員の父親と当時21歳の専業主婦の母親と3歳女児と1歳半の弟の4人家族だった。女の子は小さい頃に激しく揺すぶられたことが原因で、発達が遅れていた。

団地の住民はこの家族を気にすることはあったが、互いのコミュニケーションはなかった。家族関係は、義母の力が強く、若い母親は抑圧されていた。同い年の夫は、仕事は一生懸命するが発達が遅れている子どもへの関心は失っていた。

孤立した核家族の中で、うまく育たない子どもと、外からは見えにくい家族の力関係によって、追い詰められた母親は育児意欲が低下し、部屋がごみ屋敷のようになり、ネグレクトが起こっていった。

■支援者間のネットワークの必要性

母親は、女の子の発達がよくないことに気がつくとも、子どもを社会から隠していくようになる。保健センターは、この家族の子育てが上手くいっていないことを知り、保健師が自宅を訪問するが、子どもに会わせてもらえない。不安には思っても、それが危険なことだという知識は持っていなかった。児童相談所も、虐待について理解が十分ではなかった。母親と子どもは病院を受診したこともあった。医師は子どもの様子から一旦はネグレクトを疑うが、1週間後の受診では体重が急激に増え、親子関係が改善したこ

とで親子を家に帰してしまう。しかし、実はそれがネグレクトを発見する1つのポイントだったことを、女の子が亡くなった後に学ぶ。あざのある子や、けがのある子ども達は虐待を疑い、児童相談所につながらなければいけないことはわかっているとしても、ネグレクトの視点は持っていなかった。

この家族の支援にかかわる人たちが、それぞれに抱える不安感を出し合い、どのように支援していくか一緒に考えていくネットワークが必要であった。今は、学校や保健所や民生委員など支援にかかわる人たちがネットワークを作り、家族を見守っていくシステムが重要とされているが、当時はまだその認識がなかった。



■大阪のマンションで起きたネグレクト事件

2010年大阪市西区では、風俗店で働く23歳の母親がマンションの部屋に3歳の女の子と1歳半の男の子を置き去りにし、子どもたちが亡くなった。このとき母親は、50日間家に帰らないで自分が遊んでいる様子をずっとSNSに投稿していた。

母親はしっかりと子育てをしていたが、生活費が足りなくて借金をしていたことは夫には言えなかった。いいお母さんと思われたくて頑張るが、2人目の子どもが生まれてまもなく浮気をしてしまう。これが原因で離婚したが、養育費はもらえず、住所も転々として事件は起こった。

■行政の対応

この母親の住民票はずっと桑名市にあった。しかし、児童扶養手当の申し込みが受付途中であっても、長男の1歳半健診の通知が戻ってきても、当時、市はそれ以上この親子を探さなかった。

名古屋に移った時には、子どもが保護され児童相談所につながったことはあるが、母親本人が支援を望まなかったため行政は虐待という判断をしなかった。水商売で、単身で、若年出産で、住民票がないという生活形態だけで虐待と言ったら失礼になるからだと言う。しかし虐待に関しては、この家族は困っている、困難があるということを公的につなげることが通告であり、支援につなぐために必要である。SOSを待つのではなく、助けを求めることができな親に支援が届かないことこそが問題ではないか。行政はおかしいと思うことはあっても、もう一步踏み込まなかったことが、この悲劇の背後にはあると考えられる。

■SOSを届けることができないのは

この事件の母親たちは親からネグレクトを受けて育った。親からネグレクトを受けると、子どもはそれを隠し、親も話さないため、家庭が社会から見えにくくなる。その中で子どもが一方的に被害を受け困難を体験すると、「大人は助けてくれない」と学んでしまい、その子どもたちが大人になった時には、簡単に社会にSOSを出すことはできない。

子育ては、2人の母親はどちらも楽しんでいた時期があり、追い詰められるまでは一生懸命に子育てをしていた。2人ともよいお母さんでいたかったのに、それができなくなったときに自分を責めていく。環境のせいではよいお母さんができない状況にいるにもかかわらず、自分が悪いと責める。自分のいいところは見せられるけれども、うまくいかないことや自分の気持ちを人に伝えられない。それでも彼女たちは自分たちなりのやり方で助けを求めたが、社会を信頼する力に乏しい人たちは、社会とうまくつながっていかない。公的支援は充実し多様化していろいろな支援プログラムがあるが、自らSOSを出せない、困難な人たちがほど公的支援につながるができない。

■事件が起こった社会的背景

私たちの社会は1970年代には、正規・終身雇用の夫と専業主婦の妻と子どもがいる家族をモデルとした社会保障を設計し、家族単位で構成される社会になった。しかし、この40年間で母子家庭が60万世帯から124万世帯に倍増し、ひとり親家庭の相対的貧困が50%を超え、ひとり親家庭の20代の8割、30代の7割までが貧困と言われる時代になった。生涯未婚の男性が増え、夫ひとりの稼ぎでは生活できない家庭では妻がパートに出た。女性のパート収入

では子どもを育てられない賃金設定の中で、経済の悪化が家族を壊す部分もあった。離婚が増え、その背景にはDVの問題もあった。このように、社会が変わり、家族が大変な勢いで変化しているが、制度や私たちの認識がついていない。今も、人から評価されてその人の価値が決まり、社会の位置も決まるということが続いている。

2つの事件について言えば、他者からお母さんとして評価されれば自分はお母さんとしていられるが、子育てがうまくいかなくなると子どもを隠してしまうというあり方は、お母さんなのだから子どもを育てることができて当たり前という価値観や家族の規範に縛られているからであり、支援する側も縛られているのではないかと思う。

困窮する女性たちには性的役割意識が強い面があり、さらに家族機能の価値観が強いと、「自分は社会に支援をしてもらう権利がある」と思うよりも男性に頼ってしまい、社会の支援につながらないことが起きている。



■事件取材して伝えたいこと

きちんと子育てをしたい、きちんとした社会の一員でありたいと思ってもそれができずにいる人は、たくさん事情を抱えている。家族の規範に合わせて生きることができずに苦しんでいる人たちには、「きちんとしたお母さんになりなさい」ではなく、共に生きていく方法を一緒に探していくことが大切である。暴力の体験を持ち、社会に対して自信が持てず、ノーと言えない人たちがいる。しかし、嫌だと言うことはとても大事なことで伝えていきたい。

支援をする人たちには、正しい知識をもって、自分が感じる不安を信じて行動することが求められる。SNSなどで立派に見せている自分でつながっていくのではなく、おかしいと思うことや不安を気軽に語り合うことができ、共有できる関係が必要である。

杉山さんは、最後に、「自分のお母さんしか頼れないというのではなく、いろいろな人が実は自分を助けてくれるのだということを次世代に伝えたいというのが、私の今の願いです。」と講演を締めくくられた。



登録団体・市民団体によるワークショップ

パソコンでプリント作品作り

パソコン連絡会

パソコン連絡会の体験コーナーでは、アイロンプリント・住所シール・名刺を用意しました。

今年の主なテーマは「アイロンプリントで作品作り」です。講師より手順の講義を受け、次に各自で、好きな絵柄を選び、アイロンプリントシートに印刷し、布地に印刷したシートを当てて、アイロンで圧着して完成させます。できあがりの達成感は一ひとしおでした。体験コーナーでは各グループの講師とメンバーが培ったスキルで参加者をフォローしていました。また、フォーラムに参加することで、他団体との情報交換・共有ができ、成果が発揮できました。



プリント作品作りのポイントを解説中です！

スクラップブックング

～写真を飾って記録する～
渋

スクラップブックングで家族の歴史を残そう！写真を生かして、家族が笑顔になるアルバムをつくらう！

大事なことは、日々の出来事を記録することと、無駄な写真を整理すること。ラッピングコーディネーターである講師、渋松の提案するスクラップブックングは、市販の手に入りやすい定番商品に、家にあるペーパーやリボンを使って、アルバムを作成していきます。8名の参加者には思い思いの材料を使ってもらい、A4フレームを仕上げていただきました。



素敵な作品ができあがりました♪

歌は世につれ～俗謡にみる男女の姿～

をだまきの会

平安末期の今様とよぶ歌謡（梁塵秘抄）の中から、八首ほどの歌を取り上げ、これらを作り歌いひろめた下層の人々について学習しました。遊女（あそび）と呼ばれ自由に生きていた女性芸能者たちが、やがて排除され室町時代頃には遊女（ゆうじょ）に転落させられていき、女性全般も二極化していく歴史を学びました。

参加者の感想に、「今様そのものも面白かったが、古典がいかに現代につながっているかを解説していただき面白かった。」「『我を頼めて来ぬ男』は同世代の女子に教えたくなるカッコイイ歌。女性がちゃんと怒って反発して、我慢せずに生きる大切さを再確認しました。」などがありました。



女性の歴史を再認識

お茶席

すみれ会

「紅葉山川満」のお軸を掛け、炉の薄茶点前で一服差し上げました。正座のできない方の為、椅子席も用意しましたので、老若男女、大勢のお客様にお越しいただきました。毎月のお稽古に使わせていただいている沢井菓子店の主菓子も皆さんにとっても好評でした。参加者からは「日常の忙しさを忘れて、素敵な時間を過ごす事ができました」「久々に日本の伝統文化に触れて、いい経験でした」などの感想をいただきました。



気軽にお茶席どうぞ

リズム体操&ボクサリズム

リフレッシュママ府中

【1部】生後すぐから使えるパパと赤ちゃんのリズム体操は、0歳児のいる家族を中心に、親子のきずなを深め、情緒を豊かにする動きやリズム体操を取り入れた遊びで和やかな時間になりました。

【2部】脂肪燃焼エクササイズ・ボクサリズムは、同伴のパパにもご参加いただきながら和気藹々とした時間になりました。

参加者の中には、今回初めて女性センターに来られた方もおり、今後も1人でも多くの方に女性センターを利用していただくきっかけ作りの場を提供していきたいと思います。



パパと赤ちゃんのリズム体操♪

こころの疲れを癒す

コラージュ（貼り絵）ワークショップ

NPO 法人けやきの会

当会の活動は「こころの健康をサポートする」ことがテーマです。その活動の一つとして、今年も「リラクゼーション」のワークショップを行いました。雑誌や包装紙などの写真や文字を好きなように切り抜いて、台紙に貼っていきます。「集中しました」「入り込んで楽しかったです」出来上がったコラージュを前にみなさま笑顔でお話してくださいました。集中して手を動かし、自分を表現することで、こころの疲れを癒していく・・・自らの力で、癒されていくのです。セルフケアの一つの方法として経験いただき、癒しを感じる時間になったのでは、と思っています。



癒やされながらコラージュ製作♥

子どもと一緒にエクササイズ ママもパパも集まれ

ベビママビクス

乳幼児とパパやママと一緒に参加出来るベビママビクス。音楽に合わせて体を動かし、途中で遊びも取り入れて、親子が共に楽しめるエクササイズです。今回は9組の親子に参加していただきました。

パパやママは講師の動きを見ながら必死についていき、子どもは真似をする子、もじもじして見ているだけの子、全く違う事をする子といろいろでしたが、そのうち子ども達皆が参加して体を動かすようになりました。日頃のストレスを発散し、親子ともに笑顔になれる時間になったのではないかと思います。



子どもと一緒に腕のエクササイズ☆

パパと作ろう！ クリスマス☆アイシングクッキー

Train Kids

私達の団体では子育て支援の一環として、アイシングクッキー体験講座を行いました。

小学生とお父さんを対象に、クリスマスに向けてサンタクロースとツリーのデザインのクッキーを作りました。普段はお菓子作りをされないお父さんもお子さんと一緒にアイシングに初挑戦！和やかな雰囲気の中、楽しそうに作るお子さんの横で真剣な面持ちで作るお父さんの姿も時々見受けられました。できあがったクッキーはどれも可愛らしく、クリスマスが待ち遠しく感じられるものでした。自宅に帰られた後もこの体験が親子の楽しい会話となりますように。



みなさんなかなかの腕前です！

手話を学ぼう！！

府中市聴覚障害者協会女性部

ろう者2人を講師に招いて手話講座を実施しました。当日は天気も良く、とても暖かい日でした。

参加者は多くはありませんでしたが、体験して下さった方の楽しそうな姿を見ることができ、嬉しく思いました。

参加者からは「一人ひとりに合わせて教えてもらえて良かった。」「初めて手話を体験できたので良かった。」などの感想をいただきました。



真剣に学んでいます

子どもと一緒に遊ぼう♪ カラダオーケストラ！

サークルいきいき

子どもから高齢者まで、みんな一緒に楽しく遊んでいるうちにオーケストラのような一体感が生まれてくる…そんな不思議な遊びがカラダオーケストラです！元気なパパ2名、ママ4名、キッズ8名が集まってくれました。

紙風船ポンポン、親子ストレッチ、手も足も顔もグーチョコキパー、動物に変身、夢の中でハワイ旅行……歌ったり跳ねたり、みんなの声と動きと笑顔が繋がって、楽しく嬉しい時間を過ごせました。

参加者からは「楽しかった」「子どもと体を動かして遊べてよかった」「本気で子どもと遊べた」など、嬉しいコメントをいただきました。



夢の中でおいしいご飯を食べてハワイ旅行！

みんなで認知症予防ゲーム を覚えよう

認知症予防ネット東京府中

笑って、盛り上がり、いつの間にか脳活性化ができる楽しいゲームをしました。

初めて参加された女性は、「簡単なゲームなのに、できないと悔しい思いが湧いてきました。そして、初めて会った方と、涙が出るほど笑うなんて、人生初めてです！一人暮らしなので、話をするという機会、歌を歌うという機会があまりなく、こんなに楽しいのなら、毎回参加したいです！」と、うれしい感想をいただきました。涙が出るほど笑って、脳活性化できるゲーム、もっともっと、たくさんの方に体験していただきたいと思いました。



みんな笑顔でゲームに挑戦☆

お茶席

和文化研究会倶々楽

ロビーに立礼のお茶席を設け、椅子席で気軽にお茶を楽しんでいただけるよう企画しました。

ロビーという目につきやすい場所でしたので、小さなお子さんをはじめ多くの方にご参加いただきました。普段のお稽古では得られないお客様を前にしてのお点前は、適度な緊張感を持ちつつも充実したふるまいができました。

参加者からは「このような機会でないと体験できないので良かったです」「おいしくお茶をいただきました」などの感想をいただきました。



立礼（りゅうれい）お茶席

自分で作ろう！ お弁当チャ・チャ・チャ ウィメンズアクション府中

今回は年齢層が広く高校生の男女、これから幼稚園のお弁当作りが始まるママなど総勢7名で始めました。時間もかからず手軽にできる献立を考えてみたのですが、彩りも良く楽しく作ることができました。男性2名の参加はフォーラム企画にぴったり。また、ほとんど料理をやったことがなかった80代の方も楽しかったと言ってくれました。使った器、鍋などもちゃんと洗ってくださり、食べる前に綺麗に片づいていました。その後自分達で作ったお弁当をみんなで食べて話も弾み、とても良い内容で終わりました。



男子厨房に入るべし！

おはなしの世界へようこそ！ ～心に響く絵本と昔話～ おはなし夢くらぶ

1部の「絵本を楽しもう！」は、まず“とっておきの絵本”のお勧めポイントを紹介し、『おはなし会』で、実際に見てもらいました。

2部の「わらべ歌遊び」は、「ドングリころちゃん」「大寒小寒」「大根漬け」などを大人から子どもまで一緒に遊びました。

3部は、昔話のお話し会です。当日参加のお子さんの年齢に合わせたお話を聞いてもらいました。「その場で参加者に合わせたお話にしたのがすごいです」「子どもが飽きずににこにこ聞いていました」等、うれしい感想をいただきました。



大人も子どもも大好きわらべ歌♪

数秘術から活躍の場を探る Space 喜連 (きれ)

誰もが平等に天から授かった数字「生年月日」。この数字には、財産(才能・本質・役割・人生サイクル)が隠されています。数秘術を使って導きだした自分の数字の意味を伝え、自分自身を見つめ直すことで、気づいていなかった、または忘れてしまっていた自分を知ることができます。自分らしい活躍の場は、自分に与えられた数字の意味を知り、自分自身で「自分の財産」を見つめ直すことで探りあてる事ができます。

今回は、短い時間でしたが沢山の気づきを得て頂けました。天から授かった「自分の財産」を活かして自分らしく活躍して参りましょう！



数字の意味を知り「面白い！楽しい！」と声が上がりました

ヨガで体を整え、 男女でつくる活躍の場に笑顔を

朝ヨガ

テレビを見る時の姿勢で座ってくださいからスタートし、骨盤に良い座り方を伝授いただきました。体の状況を確認した後、緊張と弛緩を交互に入れる動作を発声しながら行い、その後無言で同じ動作を繰り返します。腕、足を使っての動作をすることで、体全体がほぐれていきます。さらに呼吸法で、ゆっくりした呼吸、激しい呼吸、ゆっくりの呼吸で1時間半があつという間でした。30回目のフォーラムに初めての参加でしたが、笑顔で日々過ごしていただける体験を提供できたと思います。参加者は男性1名、女性11名で合計12名。ご参加いただきありがとうございます。



腕ほぐしから
スタートです☆

人形劇『ぶたのたね』

人形劇サークルのびのび

来場者は総数 33 人で、中には「昨年人形劇に来て子どもがとても気に入っていたので、今年も探して来ました」と、嬉しいお声もいただきました。このようなお言葉や見に来ていただいた人の笑顔で私達自身が元気をもらい、活動を楽しんでいます。今回は、メンバー手作りの布絵本やおもちゃを使って、歌や参加型の動物組み合わせ遊びなどや、人形劇「ぶたのたね」を上演。この作品は、1年間練習を積み上げたので、メンバー達も、アドリブを加えながら、楽しくできました。子ども達も出てくるおおかみからの問いかけに、楽しんで参加していました。



リピーターのファンいっぱい♪

笑いヨガ

若松笑いヨガクラブ

初めて参加しました。参加者は男性3名、女性7名でした。

「笑いの体操」ですから、部屋は奥まった工芸室に、参加者がアイコンタクトを取り合うことができる様に輪になってもらいました。最初に、「1回笑うと寿命が1日伸びる」と斎藤茂太先生が医学的に立証された笑いの効果の話をして理解を深めました。その後は、恥ずかしさも消え、参加者全員で笑いの合唱となりました。参加者全員から、心も体も明るくなったという感想をいただきました。



笑いは元気の源です！

ゲームで脳の活性化

シナプソロジー体験コーナー

BREMS

シナプソロジーは、五感の刺激を変えながら入力の際の刺激をどんどん変化させ、そこに対応する事で脳が活性化するプログラムです。できることが目的ではなく、できない人がお得。「う〜」と考えている時に脳が喜んでいる、そんなプログラム。ロビーで遠目にご覧になっていらした方がどんどん参加して下さり、たくさんの方と楽しく笑顔でつながることができました。「教室があったら通いたい」と言うお声を複数いただきとてもうれしかったです。この先、シナプソロジーで、老若男女がつながる地域貢献が出来たら最高だな〜って思いました。



声を出してジャン・ケン・ポン☆

登録団体参加型活動紹介

健康体操やリズム体操を行っている登録団体の中から3団体が日頃の活動を体験を交えて発表しました。お互いの体操を体験しあうなど、団体同士の交流も見られました。

【住吉養気会】

瞑想から始めて座功、臥功、練功十八法、導引保健功、太極十五勢などを行っています。



【ポピーズ】

ボール、タオル、セラバンド、マット等を使い、
練功、リズム体操、ストレッチ、筋トレ等を行って
います。



【3B 健康体操】

いつまでも健康で若々しく！を目標にみんなで体
を動かすことで、体調を整え、ストレスも解消しま
す。



参加・協力団体

《講演会》

市民活動研究会
府中ネット

《ワークショップ》

パソコン連絡会
渋
をだまきの会
すみれ会
リフレッシュママ府中
NPO 法人けやきの会
ベビママボックス
Train Kids
府中市聴覚障害者協会女性部
サークルいきいき
認知症予防ネット東京府中
和文化研究会倶々楽
ウィメンズアクション府中
おはなし夢くらぶ
Space 喜連 (きれ)
朝ヨガ
人形劇サークルのびのび
若松笑いヨガクラブ
BREMS

《作品展示》

絵手紙の会ゆめえる
おさんぼ
木目込人形の会
古布あそび
コットンハウス、フレンズ
彩画会
住吉華洋会
住吉書芳会
ソーイングクラブ
千野クラブ

なぎさ会

パソコンF J C
パソコンチューリップ
パソコン8-2
パソコン花水木
パソコンバラバラ
パソコンひまわり
パソコン府中WPC会
パソコンふみづきの会
花版画の会
府中孔友
府中市女性史の会
府中ネット
府中年金者組合女性部きすげ会
みやび会
らんだむ☆個別
洋裁クラブ

《参加型活動紹介》

3B健康体操
住吉養気会
ポピーズ

《活動紹介パネル》

愛拳会
けやき消費者の会
渋
府中年金者組合女性部きすげ会
粋和会
パソコンどんぐり
パソコンもくれん
モンテッソーリ教育を学ぶ会

《記録誌作成協力》

女性パソコン研究会

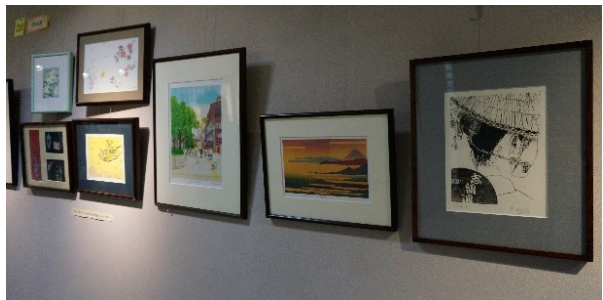
《ボランティア》

あかね着装礼法サークル
編もないと
一期一会
オアーゼ
おたまじゃくし
オムレツの会
介護者の会雲雀
健康整体あじさいグループ
健康体操クラブ
こぶし水曜会
3B親子健康体操
3B健康体操
J・J健康体操
女性と市民のためのFP研究会
自力整体悠悠
自力整体四谷
住吉E S S
ターシャ
太極拳友の会
男女スポーツ推進会
パソコンどんぐり
パソコン七期会
ピノキオ
Fairy
みんなのサロン
養生気功同好会
ヨガ遊友

《協力会社》

大塚製薬(株)
キューピー(株)
東京ヤクルト販売(株)
(株)ライフコーポレーション

会場風景





11/20



広報活動の記録



◆笑顔の万国旗◆

◆ポスター◆ (A2)

11月は市民活動推進月間 府中市平和都市宣言30周年記念事業

第30回府中市男女共同参画推進フォーラム

2016. 11. 19(土)・20(日)
スクエア21・府中市女性センター

男女でつくる活躍の場

◆作品展示 11/10(木)～20(日)
◆記念上映会「八十七歳の青春 市川房枝生涯を語る」 11/18(金) ①13:00～②18:30～
◆講演会・体験講座・ワークショップ 11/19(土)・20(日)

基調講演 11/19(土)10:00～12:00 定員の名 無料(要事前申込み)

私の7Kライフー男性が子育て、介護、看護、子ども会活動から学んだことー
あつみ なおき
講師 渥美由喜さん

◆手紙・託児 無料 要事前申込み 10/21(金)～11/4(金) ※全てのプログラムで利用可
◆問合せ・申込み スクエア21・府中市女性センター Tel:042-351-4600 Fax:042-351-4603

主催:府中市・第30回府中市男女共同参画推進フォーラム実行委員会
協力:大塚製薬(株)、キュービー(株)、東京ヤクルト販売(株)、(株)ライフコーポレーション(敬称略、五十音順)

◆当日プログラム◆ (A3 二つ折りチラシ外面と中面)

笑顔の万国旗
府中市平和都市宣言30周年記念事業

第30回府中市男女共同参画推進フォーラム

2016. 11. 19(土)・20(日)
スクエア21・府中市女性センター

男女でつくる活躍の場

◆作品展示 11/10(木)～20(日)
◆記念上映会「八十七歳の青春 市川房枝生涯を語る」 11/18(金) ①13:00～②18:30～
◆講演会・体験講座・ワークショップ 11/19(土)・20(日)

基調講演 11/19(土)10:00～12:00 定員の名 無料(要事前申込み)

私の7Kライフー男性が子育て、介護、看護、子ども会活動から学んだことー
あつみ なおき
講師 渥美由喜さん

◆手紙・託児 無料 要事前申込み 10/21(金)～11/4(金) ※全てのプログラムで利用可
◆問合せ・申込み スクエア21・府中市女性センター Tel:042-351-4600 Fax:042-351-4603

主催:府中市・第30回府中市男女共同参画推進フォーラム実行委員会
協力:大塚製薬(株)、キュービー(株)、東京ヤクルト販売(株)、(株)ライフコーポレーション(敬称略、五十音順)

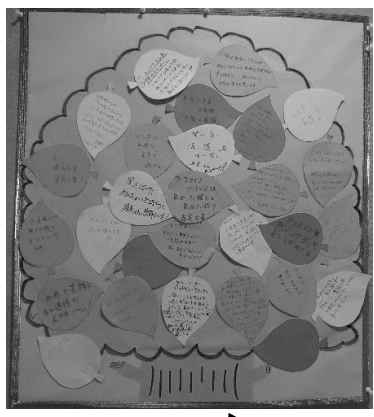
※ポスター・プログラムデザイン協力:パソコン府中WPC会

◆アイデアツリー◆

ワークライフバランスを良くする
アイデアを参加者みなさんに
出させていただきました

◆立て看板◆

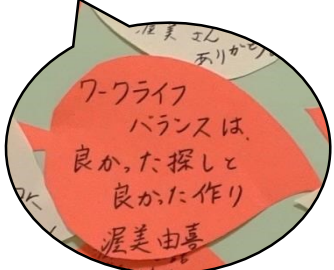
女性センター入り口で
参加者にご案内



当日は歴代フォーラムのポスター
が展示されました



基調講演講師の渥美さんも
ご協力くださいました



11/18～20 のフォーラム参加者のアンケート結果

フォーラム参加人数 907人（講座参加者707人・展示見学者200人）

アンケート結果(回答者：190人)

☆女性 153人・男性 31人・無記入 6人

☆年代 10代・2人 20代・3人 30代・12人 40代・30人 50代・30人
60代・39人 70歳以上・39人 無記入・2人

☆住まい

- ・府中市内 163人
- ・市外 25人（北区、渋谷区、世田谷区、稲城市、国分寺市、多摩市、調布市、八王子市、日野市、町田市、川口市、川崎市、仙台市）
- ・無記入 2人

☆男女共同参画社会を実現するために力を入れてほしいこと(複数回答あり)

- ・男女ともに柔軟な働き方を選択できる環境 58人
- ・保育や高齢者・病院介護施設やサービスの充実 52人
- ・女性の就労機会を増加 32人
- ・女性を政策決定の場に積極的に登用 25人

☆基調講演の感想(抜粋)

- ・久しぶり感動！（60代・男性）
- ・育児が当たり前だと思っているが、妻の力にもっとなれるように心がけたい。（30代・男性）
- ・自分が手助けできる事は積極的に手助けしていきたい。日々、やさしい言葉をかけていきたい。思いやりを大切にしていきたい。心温まる話をありがとうございました。（60代・女性）
- ・面白くお話ししてくださり、いくつか気づかされました。年を重ねてしまいましたが、残された人生をできる限り輝いていたいと思います。（70歳以上・女性）
- ・出席して本当に良かった。渥美さんの話を聞いて、たくさんの気づきがありました。もう一度聞きたいくらいです。（50代・女性）
- ・大変刺激を受けました。自分もさらに何か始めなければ、子どもに、家族に向かい合わなければと思いました。（40代・男性）
- ・貴重なお話、興味深かったです。物事の見方はひとつでないこと、これからの人生の中でいろいろ応用できる考え方だなと感心させられました。自分でも取り入れたいと思います。（50代・女性）

☆全体的感想(抜粋)

- ・日常生活から解放された時間でした。ありがとうございました。（70歳以上・女性）
- ・親子とも、とても楽しめました。アットホームな雰囲気良かったです！（40代・女性）
- ・笑うことの大切さを学びました。日々心がけたいと思います。（40代・男性）
- ・このような機会でないとは体験できないのでよかったです。（60代・男性）
- ・面白かったです。心のモヤモヤが晴れました。グループワークって最高！（30代・女性）
- ・自立した生き方をいろいろな世代で論じて欲しい。時代もキーワードになると思うので。（60代・女性）

【府中市男女共同参画推進フォーラムとは】

昭和63年2月の第1回女性フォーラム以来、男女共同参画社会の実現と女性問題の解決を目的として毎年開催。地域の人々が集い、学習し、行政と共に問題を認識し、歩み出す「きっかけの場」になっています。

第16回目からはイベント名を「男女共同参画推進フォーラム」と改称し、今年も女性センター登録団体や市民などで構成する実行委員会と女性センターが協働して企画、運営を行っています。

フォーラム開催の歴史

(第1～15回は「女性フォーラム」)

回	テーマ	会場	日時	委員長	副委員長
1	私たちのあしたは… 新しいつながりを求めて	市	S63. 2. 14	佐野春江	荒木和子 佐藤法恵
2	女も男も自分らしく生きるために	グ	H元. 1. 29	田代由美子	佐野春江 森和子
3	話しましょう、始めましょう	グ	2. 2. 4	森和子	右田房子 田代由美子
4	話し合おう！21世紀に向かって 一よりよく生きるためにー	グ	2. 12. 2	荒巻ちず	赤羽美樹子 森和子
5	行動しよう参加から参画めざして	グ	3. 11. 23～24	関和子	荒巻ちず 矢島千里
6	まず気づこう 暮らしの中から ーわたしたちは本当に自由になったかー	グ	4. 11. 22	矢島千里	関和子 横山永望
7	かわれ!府中の男たち うごけ府中の女たち	グ	5. 11. 28	和田安里子	岡本千賀子 中山節子
8	つくられた女から創る女へ いま、私たちの歩みは止められない	グ	6. 11. 20	金指光恵	三輪寛子 近藤キミ子
9	明日の自分を見つめよう！	女	8. 2. 17	浅田多津子	金指光恵 浅野明子
10	出会うこと、学ぶことから始まる “ジェンダー・フリーって何？”	女	9. 2. 22～23	佐藤法恵	漆原みつほ 三輪寛子
11	ジェンダーからジェンダーフリーへ 女と男(わたしとあなた)同じステージで輝きたい！！	女	10. 2. 14～15	漆原みつほ	佐藤法恵 須藤春子
12	キテ・ミテ・ハナソー 女(ひと)と男(ひと)との素敵な関係	女	10. 12. 5～6	岡崎妙子 白井紀子	佐藤法恵 鈴木恒代 矢島浩志
13	男女共同参画宣言都市奨励事業 記念フォーラム 第13回府中市女性フォーラム	文 女 女	11. 11. 19 20～21 12. 3. 11	小西厚子	池田房江 岡崎妙子 丸山陽子
14	ともにつくろう わたしたちのまち 「井戸端会議しませんか」	女	12. 12. 2～3	鈴木恒代	西橋結花 和田安里子
15	ともにつくろう わたしたちのまち	女	13. 12. 1～2	小西さつき	加藤礼子 榊初代 鈴木恒代

回	テーマ	会場	日時	委員長	副委員長
16	ともにつくろう わたしたちのまち	女	14. 12. 6～7	佐藤法恵	鈴木恒代
17	見つけませんか ともに生きる未来を！	女	15. 12. 6～7	田代由美子	納村万智栄 丸山陽子
18	素敵に生きよう男と女 ～私の力活かせる社会へ～	女 グ	16. 12. 11～12 11	岡崎妙子	鈴木和代 矢島浩志
19	おーい！！ 来たら何かが変わるよ	女	17. 11. 28～12. 4	岩崎真弓	鈴木恒代 穂積菜絵子
20	「私のジェンダー調理法」 ～男は仕事、女は家庭？～	女	18. 11. 25～26	穂積菜絵子	五座麻紀子 佐藤麻美
21	いまの世の中なんか変？！ ～Let's Do it now～	女	19. 12. 1～2	笠井直美	黒澤淳子 浜田広美
22	チェンジ！ 輝くひとへ	女	20. 11. 29～30	井沢サト子	岡崎妙子 積優子
23	くらやみからみこしをあげよう！	女 グ	21. 11. 28, 29 29	前川浩子	秋山由美子 矢島千里
24	ワーク・ライフ・バランス どう生きる？どう働く！私たち	女	22. 11. 6～7	桜井洋子	石川伊知朗 漆原みつほ
25	ポスト 3.11 本当の「豊かさ」って？	女	23. 11. 26～27	漆原みつほ	小野資子 鈴木和代
26	希望をもって だれとつながる みんなとつながる	女	24. 12. 1～2	鈴木和代	漆原みつほ 藤井加津子
27	今ッ！つながれば つよくなる	女	25. 11. 30～12. 1	藤田恵美	榎本久美子 村山鑑恵
28	伝えあおうよ 私たちの未来	女 グ	26. 11. 21～23 11. 22	藤田恵美	榎本久美子 村山鑑恵
29	学び、気づき、その先へ！	女	27. 11. 20～22	高梨珠子	藤田恵美 三浦真理子
30	男女でつくる 活躍の場	女	28. 11. 19～20	藤田恵美	漆原みつほ 田鍋浩美

※会場 市＝市民会館 グ＝府中グリーンプラザ 女＝府中市女性センター 文＝中央文化センター

フォーラム実行委員から一言

漆原 みつほ

今年は、フォーラムも、府中市平和都市宣言も、祝30周年でした。平和であってこそ、そしてそのための、男女共同参画推進事業。ずっと、永く続きますように。

鈴木 宣子

第30回という記念すべきフォーラムに初めて実行委員として参加させていただきました。各種登録団体の日頃の活動に感動致しました。フォーラムの準備に携わせて頂き、ありがとうございました。

田中 ゆかり

私は、実行委員もフォーラムも初めてでしたが、開催までの準備が楽しかったです。ポスターやパンフレット一枚にもこだわり、真心が散りばめられたフォーラムになりました。今は、やらせて頂いて良かったと感謝の思いでいっぱいです。ありがとうございました。

田鍋 浩美

基調講演の渥美さんの「ワークライフバランスの成功は“良かった”づくり」「共感の連鎖が社会を変える」、実行委員の「男女共同参画について、まず私たちが学びたい」…今回も数々の言葉から沢山の気づきを得ました。



フォーラム開会式にて

生田目 幸恵

見た目（ポスター・プログラム・会場装飾）に時間とお金をこれほど使うのは意外でした。私はお役に立ちませんでしたでしたがたくさんご配慮いただき、共同の推進を学び築く実行委員会に参加できて良かったです。

長谷川 愛子

2年目のフォーラム実行委員として、内容的にも深く関わることができ、貴重な経験をさせていただきました。女性センターの今後の役割も考えていく必要があるかなと思いました。

藤井 加津子

今回も、多くの方との出会いと学びがありました。そして、楽しかったです。貴重な経験をさせていただきました。フォーラムにかかわった皆様、どうもありがとうございました。今後のフォーラムのさらなる充実に期待します。

藤田 恵美

バタバタとせわしなくフォーラムの日を迎えましたが、その間も当日も素敵な出会いがありました。講演者、登録団体、職員の方々と委員の皆様ありがとうございました。ご参加下さったすべての方々に感謝です！

向井 佐知子

2回目の実行委員、楽しくやらせていただきました。フォーラムをきっかけに、良かった探し、良かったづくりをして、一歩踏み出す勇気を持ち、共感の連鎖を起こせるようになりたいと思います。（渥美さん基調講演より）

安田 由加里

広報部会を担当しました。ポスター作りやチラシ作り、委員の皆さんの意見をまとめ、作っていききました。切磋琢磨して、良いものが出来たのではないかと思います。フォーラム当日、たくさんの方に来ていただき、嬉しく思いました。

山崎 史衣

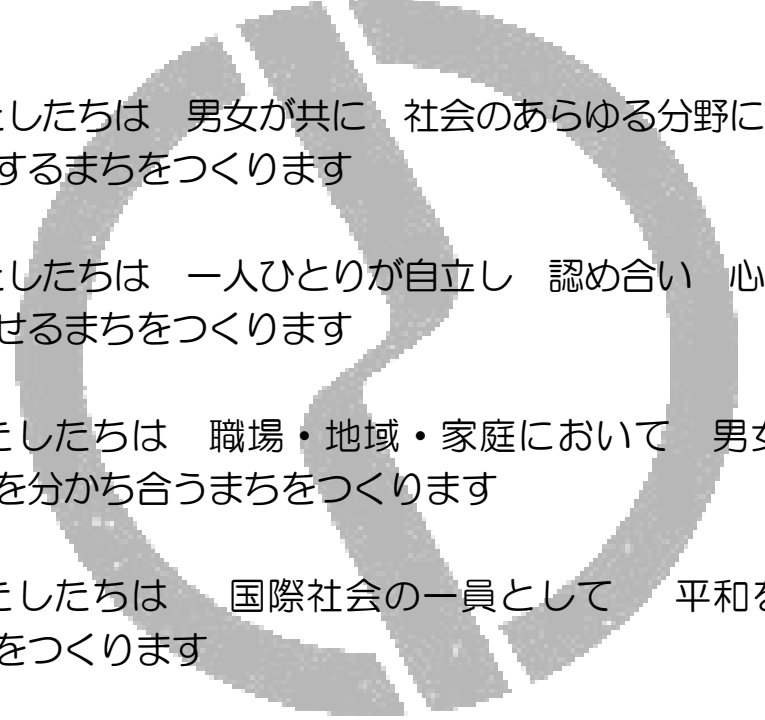
大好きな女性センターでのフォーラムに、初めて実行委員として参加させて頂きました。熱い熱い渥美由喜さんの基調講演等、充実の2日間でした。多くの出会いと沢山の気づきがありました。感謝感激しております。

フォーラム実行委員会等開催記録

1	3月21日	第1回実行委員会	自己紹介 委員長以下役職決定 開催日決定 部会の設置と担当委員決定 今年度のスケジュールを協議 登録団体に配布する参加申込書を確認
2	4月9日	第2回実行委員会	作品展示期間・作品搬入搬出の日時決定 参加申込書を確認 参加型活動発表について協議 今年度のスケジュールを協議 予算 案検討 キャッチコピー決定 ポスター等の作成について協議 基 調講演の講師について協議
3	5月27日	第3回実行委員会	参加希望団体の申込状況確認 調整会について協議 基調講演について協議 開会式の日時決定 ポスター等の作成について協議 企業への協力依頼について協議
4	6月17日	第4回実行委員会	参加希望団体の申込状況確認 調整会について協議 基調講演のテーマ決定 ポスター等の作成について協議
5	6月25日	調整会	今年度フォーラムの概要説明 講師謝礼・チラシについて 参加希望団体の内容確認 講演会の会場・時間の決定 発表部門の部屋割り・展示部門の展示場所の決定 市民団体参加について説明
6	7月29日	第5回実行委員会	調整会の報告 ポスターのデザインを決定 基調講演について協議 記念上映会・実行委員会企画について協議 会場装飾について検討 予算について協議
7	8月24日	第6回実行委員会	プログラム案を確認 会場装飾を検討 参加団体への配布物を確認 当日ボランティアの依頼について協議
8	9月16日	第7回実行委員会	プログラムのデザインを決定 実行委員会企画について協議 会場装飾について協議 フォーラム当日の流れの確認
9	10月12日	第8回実行委員会	当日までの準備と役割分担の決定 当日ボランティアについて確認 実行委員会企画について協議 予算について協議
10	11月10日～20日 登録団体作品展示 11月19日～20日 府中市男女共同参画推進フォーラム		
11	12月7日	第9回実行委員会	参加人数・アンケートの集計 フォーラム全体の反省 来年度のフォーラムについて協議
12	3月予定	第10回実行委員会	記録誌完成報告 来年度のフォーラムについて協議

男女共同参画都市宣言

わたしたちは、歴史にはぐくまれたふるさと府中を誇りとし、性別を超え、世代を超えて、互いに人として尊重し合い、共にいきいきと輝くまちをつくり続けるために「男女共同参画都市」を宣言します。

- 
- 1 わたしたちは 男女が共に 社会のあらゆる分野に平等に参画するまちをつくります
 - 1 わたしたちは 一人ひとりが自立し 認め合い 心豊かに暮らせるまちをつくります
 - 1 わたしたちは 職場・地域・家庭において 男女が共に責任を分かち合うまちをつくります
 - 1 わたしたちは 国際社会の一員として 平和を愛するまちをつくります

平成11年11月3日

府 中 市

第30回府中市男女共同参画推進フォーラム記録誌

編集&発行 府中市・第30回府中市男女共同参画推進フォーラム実行委員会

発行日 平成29年3月

連絡先 スクエア21・府中市女性センター

〒183-0034 府中市住吉町1-84 ステータ府中中河原4階

電話 042-351-4600 FAX 042-351-4603